

学習指導要領に示す「内容」の(1)のイ「時代ごとに区切らない主題を設定し」に照らして、特定の時代に偏っており、扱いが不適切である。

テーマ学習

● 日本列島を旅した人びとの東西観

日本列島は東西に細長い。江戸時代、そんな日本列島の各地に生きる人びとはどんな暮らしをしているのだろうかと関心をもち、この目でたしかめたいと全国を自分の足で歩いた二人の文人がいた。京都の医師橋 ^{たちばななんけい} 南谿と備 ^{びつ} 中 ^{ちゅう} 国 ^{こく} 岡田藩 ^{やぐしめ} で薬種業をいとなむ地理好きの古川 ^{ふるかわ} 古松軒 ^{こしょうけん} である。 ^{1759~1805}

二人はともに江戸時代後期に生きた人物である。それまでも日本各地を歩いた人物がいなかったわけではないが、多くは西 ^{さい} 行 ^{ぎょう} や松尾 ^{まつお} 芭蕉 ^{ばしょう} の漂 ^{りょう} 白 ^{はく} の旅に刺激された文雅 ^{ぶんが} の旅であった。しかし二人はちがう。そのころちょうど海岸防備（海防）問題がおこり、北方 ^{へいぼく} の蝦夷地 ^{えぞち} が注目されだし、異国に対して自分の国への関心が高まりだしていた。また商品経済の発展で各地の特産物が話題になりだし、人びとが全国各地へ目を向けるようになった時期でもあった。二人はまったく関係ないが、ほぼ同時期に同じ関心をもち、日本各地の社会や文化を観察し比較してみようと旅立った。

二人の旅はともに西国からはじまった。南谿は1782 ^{てんめい}（天明2）年、下関から九州へわたり、西側の諸国を見聞し、薩摩 ^{さつま} と大隅 ^{おおすみ} に入った。古松軒は、その翌1783年、九州へ向かった。南谿と異なり、東海岸を南下して薩摩に入った。ともに島津氏 ^{しまづ} のきびしい規制をかいくぐっての入国だった。南谿は1年 ^{いちねん} 有余 ^{ゆうよ} の西国の旅から帰ると、1785（天明5）年、こんどは北国へ向かった。雪の出羽路 ^{でわ} から陸奥 ^{むつ} へ入り、津軽 ^{つがる} で天明の飢饉 ^{ききん} の惨状 ^{さんじょう} を目撃した。古松軒は、1788（天明8）年、幕府 ^{じゅんけんし} 巡検使 ^{ずいこう} に随行して奥州街道を北上し、出羽から津軽にいたり蝦夷地へわたった。南谿は旅を終えてから、まもなく『西遊記』と『東遊記』という2冊の書物を刊行した。古松軒も『西遊雑記』と『東遊雑記』をあらわしたが、世に出ることはなかった。

二人はこの旅でものすごいカルチャー・ショックをうけた。なかでも、「言語は、男女ともにチンプンカンプンにて、十にしてその二つ三つならでは

● 日本列島の東と西

日本列島は東西に長い。そのため、昔から東国、^{西国}とか、関東、関西などと大きく地域を区分して、いまでも人情味とか、話し言葉とか、経済観念まで、暮らしぶりの違いがしばしば話題になる。本当にどれほど違うのだろうか。それを調べるのに一番たしかなのは自分の足で日本各地を旅してみることだが、それはなかなかたいへんである。そこで近代以前に、変化に富む日本列島に関心を持ち全国を歩いた人びとが書き残したもののなかから、東と西に生きる人びとの暮らしぶりの違いを調べてみるのをおすすめしたい。たとえばこんな人びとがいる。

橋南谿と古川古松軒

鎌倉時代中期、全国を歩いた人に、踊り念仏を布教して回った時宗の祖一遍がいる。彼の遊行の生涯をえがいたものに『一遍上人伝絵』がある。そこには、一遍の行ないや教えが伝えられているだけでなく、四季おりおりのなかで暮らす人びとの姿や、家屋・田畑・家畜、そして市場の風景などが生活感豊かにえがかれており、当時の日本の東と西での暮らしぶりのちがいを具体的に知ることができる。一遍以後もこうした勸進聖や勸進比丘尼とよばれ全国を回る僧侶や風雅の旅をする文人がいたが、日本列島の東と西の違いに強い関心を持ち、自分の足とするどい目で観察して歩く人物が生まれるのは、江戸時代後期に入ってからである。それが京都の医師橋南谿¹⁷³⁹⁻¹⁸⁰⁵と備中国岡田藩で薬種業をいとなむ地理好きの古川古松軒¹⁷²⁶⁻¹⁸¹⁹である。

ちょうどそのころ、国内では海岸防備（海防）問題がおり、北方の蝦夷地が注目されだし、異国に対して自分の国への関心が高まりだしていた。また商品経済の発展で各地の特産物が話題になりだし、人びとが全国各地へ目を向けるようになった時期でもあった。二人はまったく交流がなかったが、ほぼ同時期に同じような関心を持ち、日本の東と西の社会や文化のちがいを観察し比較してみようと旅立った。

二人の旅はともに西国からはじまった。南谿は1782（天明2）年、下関から九州へわたり、西側の諸国を見聞し、薩摩と大隅に入った。古松軒は、その翌1783年、九州へ向かった。南谿と異なり、東海岸を南下して薩摩に入った。ともに島津氏のきびしい規制をかいくぐっての入国だった。南谿は1年有余の西国の旅から帰ると、1785（天明5）年、こんどは北国へ向かった。雪の出羽路から陸奥へ入り、津軽で天明の飢饉の惨状を目撃した。古松軒は、1788（天明8）年、幕府巡検使に随行して奥州街道を北上し、出羽から津軽にいたり蝦夷地へ渡った。南谿は旅を終えてから、まもなく『西遊記』と『東遊記』という2冊の書物を刊行した。古松軒も『西遊雑記』と『東遊雑記』をあらわしたが、世に出ることはなかった。

琉球と蝦夷地への関心

二人はこの旅でものすごいカルチャー・ショックをうけた。なかでも言葉は、「男女とも

解せず」(『東遊雜記』)と、津軽や薩摩での聞きなれない方言におどろいた。南谿は、「されども、さすがは日本の内なれば、何れの国にても一月ばかりも逗留すれば、たがひの言葉通ぜざる事なし」(『西遊記』)ともいっているが、1か月も逗留しなければ理解できないほど異質だったともいえる。ただ、わからないといっても男と女はちがうという。なぜかといえば、「何れの国にても男子は他国へも出たるもの多ければ、大抵は詞も通じやすけれど、女は一向に通ぜず。生えぬきの国言葉なれば、ひとしおかしき事のみ多し」(『西遊記』)と、あまり生国を出る機会の少ない女性の方がなまりが強くわかりにくいというのだ。人と人との広い交流がコミュニケーションを容易にすることを身をもって体験したのである。

このほか、人びとの生活や風俗のちがい、とくに武士たちの土風のちがいにおどろくが、南谿と古松軒が強い関心を示したのが、薩摩や津軽とかかわりのある琉球や蝦夷地の存在であった。南谿は「琉球」という項目をおこし、「琉球は唐と日本に属したる国なれば」と琉球王府の複雑な立場まで紹介し、琉球にいたる奄美大島(小琉球)の人びとの暮らしにまでふかい関心を示した。古松軒は、蝦夷地におけるアイヌ社会をくわしく紹介し、松前で、中国東方地方から樺太をへてわたってきた蝦夷錦に目をみはり、「中華より来る錦」と、東韃靼国との貿易が存在することに注目する。そして、こうした地域が交易をつうじて全国へ連なっていることを紹介し、辺境とみられていた地域への誤解と偏見を解こうとしたのである。

二人がみた列島の東と西のちがいで共通するのは、「日本の国にても西の方は文華なり、東の方は野鄙なり」、「とかく日本は西より開けたと見ゆ」(『東遊雜記』)と、近世後期でもいまだ経済や文化のさまざまな面で西高東低であるという点である。彼らは、発展の度合を、五畿内・中国>西国>北国>東国、とみた。しかしその一方で、「中国・九州・及び大坂の廻船この湊に入るなり。このゆえこの町あしからず」と出羽秋田藩領の土崎港を観察したように、海運業の発達で諸国とむすぶ東国の港町などに新しい経済発展の息吹を感じとったのである。

にチンブンカンブンにて、十にしてその二つ三つならでは解せず」（『東遊雜記』）と、津軽や薩摩での聞きなれない方言に驚いた。南谿は、「されども、さすがは日本の内なれば、何れの国にても一月ばかりも逗留すれば、たがひの言葉通ぜざる事ことなし」（『西遊記』）ともいっているが、1か月も逗留しなければ理解できないほど異質だったともいえる。ただ、わからないといっても男と女はちがうという。なぜかといえば、「何れの国にても男子は他国へも出たるもの多ければ、大抵は詞も通じやすけれど、女は一向に通ぜず。生えぬきの国言葉なれば、ひとしおかしき事のみ多し」（『西遊記』）と、あまり生国を出る機会の少ない女性の方がなまりが強く分かりにくいというのだ。

南谿と古松軒がもっとも強い関心を示したのが、薩摩や津軽とかかわりのある琉球や蝦夷地の存在であった。南谿は「琉球」という項目をおこし、「琉球は唐と日本に属したる国なれば」と琉球王府の複雑な立場まで紹介し、琉球にいたる奄美大島（小琉球）の人びとの暮らしにまで深い関心を示した。古松軒は、蝦夷地におけるアイヌ社会をくわしく紹介し、松前で、中国東方地方から禪太をへて渡ってきた蝦夷錦に目をみはり、「中華より来る錦」と、東鞆鞆国との貿易が存在することに注目する。そして、こうした地域が交易をつうじて世界に連なっていることを紹介し、辺境とみられていた地域への誤解と偏見を解こうとした。

二人がみた列島の東と西のちがいで共通するのは、「日本の国にても西の方は文華なり、東の方は野鄙なり」、「とかく日本は西より開けたと見ゆ」（『東遊雜記』）と、近世後期でもいまだ経済や文化のさまざまな面で西高東低であるという点である。彼らは、発展の度合を、五畿内・中国>西国>北国>東国、とみた。しかしその一方で、「中国・九州・及び大坂の廻船この邊に入るなり。このゆえこの町あしからず」と出羽秋田藩領の土崎港を観察したように、海運業の発達で諸国とむすぶ東国の港町などに新しい経済発展の息吹きを感じとったのである。

図書館で『一遍上人伝絵』を鑑賞し、すでに紹介した南谿や古松軒の見聞記を読み、さらに沖縄県や北海道の歴史を調べてみると、日本の東と西への関心がもっと深まるだろう。

『東西遊記』にえがかれた

鹿児島うししめの牛合

